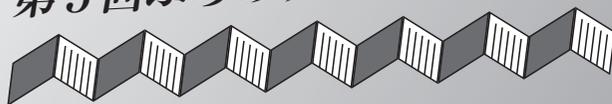


特別企画 1

子どもの貧困と向き合う学校の役割を考える——公費による豊かな学びの保障と子どものための協働

第5回ふらのフォーラム in 札幌



末富 芳 (すえとみ・かおり) ●日本大学

はじめに

2015年のふらのフォーラムは札幌で開催されました。

私は内閣府の「子供の貧困対策に関する検討会」有識者委員として、子どもの貧困対策の「プラットフォーム」としての学校（学校プラットフォーム化）、という方向性を提唱しました。ふらのフォーラムを通じて考えたこと、政府案と自身の学校プラットフォームとの相違、また学校プラットフォームを通じて子どもの貧困対策をどうしていくべきかについては、論文が2月に公刊される予定です（関心がおありの方は文末をご覧ください）。

学校現場での子どもの貧困への取り組みは、今も拡大し、さまざまな取り組みが進みつつあるところですので、学校事務職員や教職員のみならず、スクールソーシャルワーカーや教育委員会のみならずとの協働の中で、学校を拠点（プラットフォーム）とした子どもの貧困対策とともに考え、実践していくことを大切にしていきたいと考えております。

以下、「1」でふらのフォーラムでお話させていただいた内容、「2」で当日の参加者のみなさまとの対話からの気づきを述べさせていただきます。

なお今回は家庭の事情で、北海道初上陸となる長女も連

れての参加となりました。子連れでのフォーラム参加をお許しいただいた関係者のみなさまにこの場を借りて御礼申し上げます。

1. 子どもの貧困と向き合う学校の役割を考える—— 公費による豊かな学びの保障と子どものための協働

(1) 子どもの貧困対策の現状と学校プラットフォーム化の課題

年々悪化する国民全体の貧困化の中で、子どもの相対的貧困率は16・3%にも達し、6人に1人の子どもの貧困という状況にあります。子どもの貧困問題の深刻化を受け、2013年に子どもの貧困対策の推進に関する法律が成立、2014年に子どもの貧困対策に関する大綱が閣議決定されました。2015年4月より、文部科学省、厚生労働省や内閣府における政策実施が始まっていますが、政策開始でいえば2015年度のみ、実質「1年目」の子どもの貧困対策が開始されたにすぎません。

「大綱」の内容や学校プラットフォームへの期待はすでに『学校事務』2015年2月号にも、「子どもの貧困対策と学校の役割——学校を子どもの『良い人生』のためのプラットフォームに」で述べさせていただきました。ふらのフォーラムでは、その期待とともに子どもの貧困対策における学校プラットフォームモデルについて、心配な点を5点述べさせていただきました。

- ① 貧困率の数値改善目標の見送り
- ② 大学・専修学校等給付奨学金の見送り
- ③ 学校種間の連携体制の必要性
- ④ そもそも子どもの貧困をどのように捕捉するかについて、有力な指標を欠いている
- ⑤ 「プラットフォーム」モデルに対する多様な理解が学校の多忙さを加速させる懸念

(2) 子どもの貧困が見えない学校から「プラットフォーム」としての学校へ

子どもの貧困対策に関わる社会福祉系の研究者やスクールソーシャルワーカーから、しばしば苦情を受けるのが「なぜ学校のセンセイには子どもの貧困は見えないのでしょうか？」ということなのです。

背景を考えるとテストスコアという意味の学力政策のもとで、教員に課される指導力重視の方針、傾斜的資源配分の欠如（厳しい状況の多い学校に多くの教育予算や教員が措置されるルールがない状況）の中で、貧困状態にある子どもや保護者は「しんどい子」「しんどい保護者」としてとすれば学校からも排除される対象となってしまうがちなことは否定できません。

しかし、日本にも子どもの貧困対策のプラットフォームとして機能している教育委員会や学校があります。

具体的には、単に子どもの学力を上げようとするのではなく

く、学力を下支えする子どもの家庭での生活習慣を改善しようとして学校以外での支援にも取り組む、自己肯定感の向上や低学力層の底上げのために学校での指導の在り方を教職員がお互いに見直していく、などの取り組みは国内の先進自治体のケースでの共通点として挙げられます（福岡県田川市・大阪府茨木市など）。

（3）公費による豊かな学びの保障と子どものための協働

しかし学校プラットフォーム化の前提として、公費の充実が必要です。低所得世帯やひとり親世帯への経済的支援の充実は無論のこと、学校において子どもたちに豊かな学びを保障していくために公費による就学費負担の軽減は必要です。教育財政を専門とする私自身も、あきらめかけていたことですが、子どもの貧困対策に関わる方々は、子どもの幸せのために学校こそ頑張ってほしい、そのためには家庭の経済的支援とともに公教育費の充実も非常に重要であるという信念を持っておられます。

教育学の研究者として、子どもの貧困対策に関わってよかったと思うのは、子どもたちのために理想をあきらめず、関係者がみな協力して頑張ること、という大切な大人としての姿勢を思い出させてくれたことです。公教育費の増額によって教職員が子どもに手厚いケアをでき学校がもっと良い居場所になったり、保護者の教育費負担の軽減が行われることは、何よりも子ども自身の幸せにつながります。

公費増額のためには、どのようなルールのもとで、いくら必要であるのかという必要額の算出も重要になってきます。北海道の学校事務職員のみなさまが長年積み重ねて来られた就学援助調査や、公費私費の調査のように、丁寧に学校現場や保護者の状況を把握する取り組みの重要性が今後ますます注目されるはずです。

2. 当口の対話から

（1）スクールソーシャルワーカーに関連して

スクールソーシャルワーカーが、教育委員会に配置されているはずだが、学校には来ない、また実際に配置されたときにどのように協働していけばよいか、という問題提起がありました。

理想的に考えれば、スクールソーシャルワーカーは、各学校に1名配置されていてほしいですが、現実には教育委員会配置で学校からの要請方式を採用している教育委員会も少なくありません。しかし要請方式では、厳しい状況にある子どもや保護者の情報共有ができないというケースもあります。川崎市で中1の男子生徒が殺害されるという痛ましい事件もありましたが、文部科学省による「連続して欠席し連絡が取れない児童生徒や学校外の集団との関わりの中で被害に遭うおそれがある児童生徒の安全の確保に向けた取組について」（平成27年3月31日）でも指摘された通り、日常から

の教職員、スクールソーシャルワーカーや警察関係者、児童相談所等の関係者が情報を共有できる体制を構築しておくことが重要です。

そのためには、たとえ教育委員会配置のスクールソーシャルワーカーであっても、学校を定期巡回し、「気になる子ども・保護者」の情報を共有していくことが重要です。

また一人職であり、家庭の経済的状況も把握するという意味ではスクールソーシャルワーカーと学校事務職員の職務には共通性があります。校内でのケース会議などに学校事務職員も積極的に関わることが重要です。

(2) 学校事務職員の役割

子どもの貧困対策において、学校事務職員の役割は重要です。

- ① 就学援助制度の積極的な発信と手続きサポート
- ② 私費負担軽減・公費増額のための自治体別の研究活動と情報の積極発信、制度改善への提言
- ③ スクールソーシャルワーカー、スクールカウンセラーとの協働、特に「しんどい保護者」に対しては早期のチーム体制の整備が重要（学校の「窓口」としての学校事務職員）
- ④ 可能であればスクールソーシャルワーカーと連携して、

主要機関・NPO等の連絡先一覧等の整備、などが具体的役割として考えられます。



ふらのフォーラムメンバーの山本さん・菅原さんと長女（富良野市のへそおどりにて）

学校プラットフォーム化と関わって、チーム学校改革も打ち出されました。学校事務職員への期待とともに教員以上にも忙忙化していかないかという心配もあります。まずはできることから、小さいことでも良いので、厳しい状況にある子どもたちのために取り組んではいけないでしょうか。

学校を子どもの貧困対策のプラットフォームとしていくためには、学校事務職員、教員、スクールソーシャルワーカー、スクールカウンセラーの増員や待遇改善も急務です。子どもたちのため、また学校現場のみならずの努力をより実り多いものとしていくために、私自身も課題として取り組んでおります。

〈参考文献〉

末富 芳「子どもの貧困対策のプラットフォームとしての学校の役割」『日本大学文学部人文科学研究所紀要』第91号、2016年2月刊行予定